

【悲報】無惨さま、禰豆子の鬼化に失敗して殺っちまった模様。

ζ+

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鬼舞辻により、妹を含めた家族を皆殺しにされた竈門炭治郎。

溢れ出る憎しみの慟哭は、現場で邂逅した水柱の心を激しく打つものだった。

そして紹介された育手そだての元、少年は家族への誓いを胸に覚醒していく。

——すべては、地獄なみだを超えた先で、笑顔の花を咲かせるために。おまえに出来ないはずがない——すべての鬼を皆殺せ。

※主人公は希望ヒカリに焦がれた炭治郎さんです。

※繰り返し返される「まだだッ」にご注意下さい。

目次

第一章「光の殉教者」

第一話	1
第二話	10
第三話	21
第四話	34
第五話	47

第一章「光の殉教者」

第一話

奪われたものは、奪い返さねばならない。

涙も、嘆きも、痛みも、皆すべて、希望で焼き尽くしてやるべきだ。

そして地獄の先にも花は咲く事を、人は陽だまりに辿り着けるとい
う事を、証明してみせる。

故に――

「おまえが」

俺は、目の前の者に確認する。

それは、俺の覚悟を決めることと同意様だ。

「ん？」

「喰ったのか、この人たちを」

「ああ、うまかったぞ。で、おまえは――なんだ、ただのヒトか」

まるで何でもないかのように答えるそこ者に、怒りが沸いて収まら
ない。

しかし、”違う”。

こいつではない。

そう分かると、幾分か俺の気も落ち着いてくる。

だが、許すなんてことはありえない。

平穏な日常を、何の罪もない人々を不幸に落とす鬼共は皆殺しにし
てやるべきだ。

「おまえこそ、ただの鬼か」

「んだとオ？」

「匂いが違うんだ。俺が探してる奴と」

「そうか。で、用はないからもう行っちゃまうとか、寂しいこと言わねエ
よな？」

どうやら、鬼は目の前のごちそうでは満足していないらしい。

その証拠に、月明かりに照らされた廃寺の中、口元が赤く染まった
鬼は、涎を垂らして俺を穴があかんばかりに凝視していた。

「逃げたりしねエよな？」

ひとり、ふたり……

それだけ喰らっておいて、呆れたものだ。

本当に鬼はどうしようもない。

ごめんなさい、その人たち。

すぐに鬼を倒し、埋葬してあげますから。

そんな風に亡骸に向かって合掌し、鬼に向き合う。

腰に差した刀の柄に手を置きながら。

「もちろんだ。これは村にいる知り合いの鍛冶職人のおじさんに貰った刀。そして目の前には抹殺すべき悪鬼もいる。この状況で、どうしても俺が逃げなくてはならない！」

「ははっ、よく言ったッ！」

だから、殺す。

もうこのような悲しい人たちを生まないために。

俺は、刀を抜き、正面に構えた。

すると、ドンツという衝撃と共に、鬼の醜悪な顔面が目の前に詰まっていた。

「ハハ、やるな。なかなかいい反射神経じゃねエか」

「くっ、なんて力なんだ」

気を抜いたら、押し倒されてそのまま殺されてしまう。

だから、俺は必死に押し返す。

だが、そんなものは微々たるものでじわりじわりと押し負けていく。

まるで、死神がゆつくりと近づいてきているような感覚に、ぶるりと身体の奥底から震える。

「そりゃあ、たっぷりここで喰ってるからな。喰った分だけ強くなる。

腹も満たされる。この廃寺はオレの天国……さッ！」

鬼はニヤリとおぞましく嗤った。

すると突然、体が飛ばされたかと思うと、腹にズシリとした痛みが走った。

そしてそのまま扉を突き破り、俺の体は寺の石畳に強烈に叩きつけ

られる。

「ぐッ」

「オラ、まだまだア！」

そして、すぐさま距離を縮められ、鬼の拳が俺の頭を左から打ち付けた。

刀を構える暇もない。

視界がぐるりと回転する。

転がされたのか。

「おいおい……大丈夫かよ、お侍さん。もうフラフラじゃねえか。無理して立たなくてもいいんだぞ？」

——喰って俺の力にしてやるから。

親切な言葉とは裏腹に、目はそう言っていた。

「ハアハア、余計なお世話だ」

確かに言われた通り、まっすぐ立っているつもりなのに視界が揺れる。

頭を殴られたダメージは大きいようだ。

こいつの拳は、岩のように硬い。

「喰われちまえよオ、楽になるぜ……おっ、いい満月じゃねえか」

「おまえこそ、余所見なんてしてていいのか」

息を整え今度こそ。

空に気をとられている今がチャンスだ。

俺は鬼を斬り殺さんと飛びかかり、刀を振り上げた。

「いや、大振りすぎんだろ」

「なに……ぐッ」

思いつきり腹に衝撃が入る。

一瞬だが息ができない。

どうやら誘われていたらしい。

「お侍とか言って悪かったな。おまえ、ただの棒切れ持ったガキだわ」

「がはっ、はあはあ……まだ、だ……ッ！」

俺は、落としかけた刀の柄を再び強く握りしめ、一步踏み出した。たしかに先の一振りは焦って大振りだった。

この鬼ははやい。

刀を抜いた途端に見えないはやさで距離を詰められたし、その後の追撃も見えなかった。

そんな相手に、力任せの一撃なんて無茶な話だ。

「はアツ」

だから今度はしつかりと。

相手は人喰いの化け物。

油断は禁物だ。

「ほう？」

そんなことを意識したおかげか、俺の刀と、鬼の拳が金属が打ち付けあうような甲高い音を響かせながら、何度も、何度も重なり合う。

「刀があたれば、斬れるし殺せる。あたればな。その前提がダメだ。おまえさん、誰かに指導して貰ったことがないんじゃないか？ そういう培った技量ってのは、殺意じゃまかなえねえんだよ」

未だに打ち合っているのは、言われなくても分かった。

手加減されているのは、言われなくても分かった。

「こんな風に、なっ！」

鬼としては少し力を込めただけかもしれない。

しかしそれだけで仮初めの拮抗は崩れ、俺は吹き飛ばされた。

足りないのは鬼のいう通り技量、そしてこのように押し負けてしまわないための筋力か。

「しかし、技量——そう、か……」

だが、技量は足りなくても技ならば——

「まだ立ち上がるか。いやはや根性は見上げたものよなア。じゃあちよつと、キツいのいくぜ？」

「……俺は、義勇さんに1つだけ技を見せてもらったんだ。鬼殺しの技を」

俺は間合いを図る。

思い出せ、あの時の技を。

「ほう、何かあるのか」

「水の呼吸——」

只人故の、本気のそれを――

「ならばオレも、相応に相手をしよう。オレは血鬼術こそまだ使えないが……ヒトの時に培った技術はある。故にこれはただの、拳の極み。これで立てたら誉めてやるぜ、ニンゲンッ！」

「壺の型、水面斬り」

「見事」

鬼は、首を斬れば死ぬ。

これで終わりだ。

「――なんてな」

――ッ!?

「こんな傷すぐ治るからな。ほらもう血は止まった」

くそ、わかっていた筈だろ。

相手は化け物。

実際に相対して、この程度で終わりなはずはない。

ならば、繰り返す。

死ぬまで切り刻んでやるだけだ。

「まだだッ！ 水のこきゅ――」

「――遅え」

だから、嘘だろ。

現実……なんだ、どうして。

「二度はやらせねエよ」

主役の腹に手がねじ込まれているのだ？

「――まだだッ！」

「頭突きでこれか。おまえ、頭かてエな」

ダメだ、すぐには動けない。

時間稼ぎをしなくては。

「不思議そうな顔をするな。俺だって、首を斬られたのは初めてだ。噂では、鬼殺しは首を刎るって話だったんだがな。いや、何か忘れて……まあいいか。おまえもそんな感じに聞いてたんだろ？ しかし冷静になると、不思議なもんだな。俺は本当に不死身の化け物だったらしい」

だめだ、血が止まらないッ
力が抜けていく……

「あ、ぐああ……ッ」

だが、それがどうした。

是非もなし。

「しかしお前、なんでまだ立てるんだ？ いや、腹に穴あけたんだぞ。
おかしいだろ」

「俺は……死なない、朽ちない、諦めない。誓ったんだ。家族と、息絶え絶えの妹と。かならず家族を殺した鬼を殺す。悪鬼滅殺。それだけに留まらない。一匹残らず、総ての鬼を滅ぼし尽くすと」

「ははッ！ 不死身なところは、似たもの同士ってわけか！ 面白れえ。だがしかし、御大層なこと言う割には、おまえのそれはただの復讐だろ。つまらねえな」

「違う。心中するつもりもないければ、復讐に終わるつもりはない。その先に、輝ける明日があると。人は陽だまりに辿り着けると証明して見せるんだッ！」

そうとも俺は。

復讐では終わらない。

悪鬼滅殺——かならず鬼殺しを完遂する。

その先にある未来を創造して。

「ほう、まだ斬りかかってくる元気があるか。ホントにおまえ、ニンゲンか？」

思い出せ。

先の“水の呼吸”は何かが足りなかった。

結局俺がなせたのは、技の模倣。

本質をとらえられていない。

あれでは“水面切り”と叫びながら、刀を真一文字に払って攻撃しただけだ。

それじゃ鬼殺しの技には足りない。

義勇さんの“壺の型”にはほど遠い。

だとしても、諦める訳にはいかない。

「彌豆子、見ていてくれ。俺は、必ずやり遂げる。だから——」
水の呼吸、その本質はまだつかめない
だからこれは、賭けになる。
ただの模倣。

しかし、偽物が本物に敵わないと誰が決めた。

忘れるな。俺は人間。

人間は可能性の塊なんだ。

気合と根性でなんともできる。

故に、

まだだッ！

「水の呼吸——」

”勝つ”のは俺だ。

「壺の型、水面斬イリイイイ！」

「そうか、それがおまえの全力か。だが、すまねエ」

え……？

「オレは、戦の中に生きたかった。だから頭を垂れて鬼にまでなったが……それを忘れて欲望にとりつかれた。屈辱だ。その勇ましく突き進む姿、尊敬するよ。お互い死力を尽くした果てになら、おまえに殺されてやってもよかった」

技は……完ぺきだった。

まるでそうなるのが当然かのように、俺の刀は鬼の首に吸い込まれていった。

ピンと張った糸。

その上を滑るみたいに。

「あ……れ……」

「今回は、ふむ。切り落としたな。俺の胴体と体がお別れだ」

俺は、宙に浮かんでいる。

首を捕まれないながら。

息が苦しい。

「でも、死なねえんだ。思い出したよ。その刀じゃだめだ」

「く……そ……」

酸素が回らない。

「日の光を溜め込んだ金属があるって話だ。鬼は、日光を浴びると炭化して死ぬ。日の光が毒ってことさ」

「……たり、ない……」

「楽しかったぜ。さあ、首の骨を折るぞ。首を抑えられては、得意な石頭での頭突きもできない」

もはや、俺の体は動かない。

正しい“壱の型”を、本質を捉えることなく、感覚的な覚醒で再現したからだろう。

その代償に、体中の筋肉が悲鳴を上げ、関節は少し動いただけで激痛が走った。

もはや、この鬼の手をほくくすることもできない。

「だから、じゃあな——ッ!？」

薄れ行く意識の中、視界の端に“天狗の面”が映り込んだ。

「おまえは、誰だ？」

「どうやら鬼は“誰か”と話しているらしく、俺をどさりと投げ捨て、自身の頭を拾っていた。

ガツンと地面に叩きつけられた俺は、ただ全身を迸る痛みに耐えながら、目を開き続けるので精一杯だった。

「……」

「何とか言え……ッおい、何て速さだよッ!? オレが捉えきれねえだど!？」

「……」

「今のは——水の呼吸？」

「……」

その一瞬にして、鬼の首は落ちていた。

「……呼吸を解せず、”技”を使ったか」

鬼を殺し、刀を納めながら近づいてきた男が、初めて喋った。足音がしない。

声は聞こえているから、耳は生きているはず……

この男は誰なんだ。

「儂は鱗滝左近次^{うろこだきざこんじ}。義勇の紹介はお前で間違い無いな？」

「いい、何もいうな。その出血量では幾分も持つまい」

「だから、”呼吸”をしろ」

どうということなんだろう？

血が足りないせいとか、意図が読めない。

「炭治郎、呼吸だ。全身に酸素を取り込み、細胞ひとつひとつまで、おまえ自身の身体を感じる」

だが、その渋い声色には優しさがあった。

ならば俺も答えなければ。

「儂はこのまま、おまえを治療できるだろう”屋敷”に担いでいく。その間、この出血では普通だったら死んでいるだろう。だから——」

「そうだ、できているぞ。それが”全集中の呼吸”だ。そのまま損傷箇所を止血しろ。うまくいけば、おまえは生きる」

「こらえろよ、炭治郎！」

……

第二話

「ここは……?」

「そうだ、俺は鬼に捕まって——!」

俺は思わずベッドから飛び上がってしまったが、どうやらそこには誰かがいたようだ。

その人と、俺の頭がぶつかってしまった。

「!? ごめんなさい! 大丈夫ですか?」

そこには、蝶のような髪飾りをした、サイドテールの女の子がいた。しかし、特に気にした様子はなく、そのまま椅子から立ち上がり、部屋に一つしかない扉の方へ歩いて行った。

「あつ……行ってしまった」

ここはどこなのだろうと思案していると、少女が去っていった扉が再び開いた。

さっきの子だろうか。

お礼と、謝罪のために口を開くが——

「あ、あの——っ!」

違う女の人だ。

だが、頭の後ろでさっきの女の子がつけていた髪飾りに似たものをつけている。

「うん……? 目が覚めたようですね」

「あ……はい」

すると、その女性は少し思案する間を置いた。

「ああ、私と入れ違いになった女の子は、つぐこ嗣子」のカナヲといいます。坊やが目覚めるまで看病をしてもらっていました。恥ずかしがり屋さんなので、なにか粗相をしてしまっても許してあげてくださいね」

「はい! でも、粗相とかではなくで、俺が急に起き上がったのでぶつかってしまったんです。謝りたくて……」

あの子は、「つぐこのかなを」……というのか。

「あら、まあ。その辺は後で本人に言ってあげてください。それにし

ても、急に起き上がったりしたら、傷が痛みませんか？ 一応、私が色々処置はしておきましたが……なにせあんなにひどい有様でしたし」

「え——っ!? あッ!?」

意識した途端この世のものとは思えない、身体の中から何万本もの針が埋まっているかのような激痛が走った。

「どうやら自分の身体がどれ程損傷してるか気付いてなかったみたいですね」

「ガハッ——うう、くう」

「落ち着いて。呼吸を整えてください」

「う……はあ、はあ……すう——」

呼吸を。そうだ、呼吸を整えろッ！

あの時のように。

「ふう……」

「落ち着きましたか。どれ程の傷かと言うと意識してしまうので言いませんが、まあざっくり言えば死にかけです。包帯も取らないようにしてください。特殊な薬品を染み込ませてありますので」

痛みは引かないが、だいぶマシにはなった気がする。

そして特殊な薬品……なるほど、ツンとした草の匂いがするわけだ。

話しぶりからして、この女性のおかげで俺は生きているらしい。

「私も鱗滝さんが急に担ぎ込んできた時はおどろきましたよ。ぐったりとした様子は、死人でも担いできたのかと思ったほどです」

入ってきた時からずっとにこやかな表情なのだったのだが、そんなに言われるほど酷かったのか……

「ええ、坊やが思っている以上に重症です。目が覚めたと言っても、安静にしてくださいね」

「はい……」

「おっと。自己紹介がまだでしたね。私は胡蝶しのぶ。この屋敷の持ち主で、専門は薬学ですね」

「ご丁寧ありがとうございます。俺は竈門炭治郎かまどたんじろうといいます。助け

ていただいております」

「いえいえ、そう畏まらなくていいですよ。感謝なら、竈門君を運び込み、この刀を拾ってきてくれた鱗滝さんに言ってください」

「はい……って!? その刀は!?!」

「はい。現場で殺された方の埋葬ついでに拾ってきてくれたそうです。竈門君をここまで担ぐのには邪魔だったようで、一度放置してしまっただけです。謝られていましたよ」

「そんな。むしろ俺が助けられ、感謝する立場なのに……ありがとうございます
ございます」

そうか、鱗滝さん。

俺の代わりにあの人たちを埋葬してくれたのか。

「お返ししますね。ですがこれ——私の勘違いでなければ、”ただの刀”ですよ」

「……? はい、ただの刀です」

「えっと、竈門君は鬼と戦って重症になったと聞いていたんですが……まさかこれで?」

「はい、鬼と戦って——」

「——俺は、殺すことができませんでした」

「いえいえ、そんな落ち込まないでください! これで殺せたら、それこそわけがわかりませんから!」

そう、俺は殺す手段を持っていなかった。

技術も、体力もなく、ただ覚悟のみで挑んでしまった。

世の中は心だけでなんとかなるほど甘くはないと痛感する。

もつと、俺に力を。

心技体、全てを備えなくては。

「これに関しては鬼殺隊としての問題でしょう。まだ隊員でもない坊やを危険にさらしてしまった。ごめんなさい竈門君。”柱”が説明不足で色変わりの刀、”日輪刀”のことを教えなかったなんて、許されないことです。本当に、生きていてくれて良かった」

「しのぶさん、頭を上げてください!」

知らなかったとはいえ、挑んだのは俺の意思であり、責任だ。

しのぶさんにも、もちろん義勇さんにも謝られることなど何もない。

「富岡さんには、後で謝罪しに来させます。たっぷり文句を言ってあげてください」

「え、でも〝柱〟を呼びつけるなんて……」

〝柱〟とは、鬼殺隊の中でもっとも位の高い9名の剣士である。

「ふふ、心配してくれてありがとうございます。私はこれでも〝蟲柱〟なので問題はありませんですよ」

「むしろ……柱?」

「あつ、その顔。信じてませんね……?」

とてもしのぶさんがそうには見えない。

どちらかというところ、〝隠^{カクレ}〟とよばれる非戦闘部隊の所属なのではないだろうか。

「私は柱の中で唯一鬼の頸^{くび}が斬れない剣士ですが、鬼を殺せる毒を作った、ちよつとすごい人なんですよ?」

その後、しのぶさんは俺の包帯をてきぱきと変え食事を持ってきてくれた。

2日ほど寝込んでいたようで、とても腹が減っていた。

食事は、いきなり内臓がビックリしないようにお粥だ。

とても食欲の誘ういい香りがする。

俺はひったくするようにして器を受け取り、無心で食った。

ちよつと苦いけど、うまかった。

なんでも、身体の自然治癒力を高める薬草をすりつぶして混ぜてあるそうだ。

食事が終わり、窓から空を見れば影が短い。

時刻は正午といったところだろうか。

相変わらず全身が痛むし、腹部は——考えたくもない。

はやく鬼を殺しに行きたいが、今は体を休めるしかないだろう。

「賢明な判断です。今竈門君にできるのは、食べて寝る。ただ、それだけですよ」

「はい……」

それでも、俺は一刻も早く家族の仇を打ちたい。
燻る激情を抑え、俺は瞼を閉じた。

ここに来て、かれこれもう一週間。

俺は歩けるまでには回復していた。

だが、激しい運動は禁止。

本当はしのぶさんは、俺がこうして持っていた刀を杖にしてまで動くことを良しとしていなかった。

そもそも、傷の具合からして今歩けるのが不思議らしい。

俺としては、はやく動けるようになりたいし、まだ足りないところだ。

そうして久々の太陽の元、ふらふらと覚束ない足取りで庭を徘徊していると、一人の少女が縁側に腰かけているのが見えた。

とても見覚えがある少女だ。

「つぐこのかなを……だよな？ 看病してくれてありがとう！ 俺が目覚めた時頭ぶつけちゃったけど、大丈夫だった？」

初めて戦った鬼にも石頭と言われたし、少し心配していた。

不思議とこの広い屋敷の中、彼女とは初めて目を覚まして以来会っていないかった。

まあ、俺が病室から動いていないっていうのもあるのだが。

「違う」

「え？ ゃ、ごめん！」

な、名前を間違えてしまった。

どうやら記憶違いをしていたらしい。

特徴的な名前だったから、むしろ印象的だったのだが……

「『嗣子』は柱が育てる隊士」

そういうことか。

“つぐこ”は特有の名詞。

柱が育てるってことは、しのぶさんが師範なのだろう。

「なるほど。ごめん、じゃあカナヲか。俺は竈門炭治郎っていうんだ。よろしく」

「……」

あれ？

「……」

「……」

沈黙が辛い。

「!?」

「……」

カナヲはどこからともなくすつとコインを取り出す。俺はそれが何か気になって少し目を凝らしてみたが、“表”という文字が書かれているだけのようだ。

するとそのままピンと親指で弾き上げ、自由落下するそれを手の甲にパンツと打ち付けた。

カナヲの瞳が、そつと開いた手の隙間に落とされる。

「師範の指示に従っただけなので、お礼を言われる筋合いは無いから。さようなら」

喋ってくれた！

「えつと、今投げたのは何……?」

「さようなら」

あからさまに無視された!?

「それ……何?」

「さようなら」

重ねての拒絶。

だが、そうまで隠されると逆に気になってしまう。

「表と裏って書いてあるね。なんで投げたの?」

「……」

「あんなに回るんだね」

「……」

「あつ……行っちゃった」

こうして、俺とカナヲの最初の邂逅は失敗に終わってしまった。

さらに数日。

「さて、現状の鬼と鬼殺隊については以上です。何か質問はありますか？」

もう俺の体は全快といっていいくらいだろう。

傷痕は残っているが、もうどんなに動いても痛みはない。

しかし、どうやらしのぶさんは本当に申し訳なく思っているようで、こうして暇を見つけて、直々に座学という形で指導をしてもらっていた。

「ありがとうございます。つまりこれから俺は、”育手^{そだて}”の鱗滝さんの元で修行し、”最終選別”に合格すれば、鬼殺隊の一員になれると”育手”は、文字通り剣士を育てる。

それは山程いて、それぞれの場所、それぞれのやり方で剣士を育てている。

そして最終選別を終えれば、専用の鬼殺しの刀”日輪刀”を支給してもらえる。

これが重要なところだろう。

前回は殺す手段が足りなかった。

いくら気合いと根性で鬼と張り合えても、止めを差せねば鬼殺しは完遂できない。

俺の目的——悪鬼滅殺のためにも、これらは必須のものであった。

「そうですね。炭治郎君は理解が早くて教え甲斐があります」

「しのぶさんの教え方が上手ですから」

「あらあら、お世辞もお上手ですね」

お世辞ではなく、本心なのだが。

しのぶさんは薬学が専門なだけあって、論理的な説明がうまい。

どういう成り立ちで鬼と人の戦いが生まれたのか、体系的に順序立てて教えてくれた。

俺は、妹にも人に教えるというのが下手だと言われていたから見習

いたいものだ。

「炭治郎君の身の上話は聞きましたし、悪鬼滅殺を願う気持ちも分かります。富岡さんが”育手”を紹介したのも納得です」

そして俺は、一通り義勇さんにも話したことを伝えていた。

身の上話というのは大げさだが、

とにかく家族の仇を打ちたいから鬼殺隊に入りたいということだ。

「……やはり、鬼と人は仲良く出来ませんよね」

しかし、そう言うしのぶさんの顔には影が差している。

どうしたというのだろうか。

「しのぶさん……？」

「いえ、なんでもありません。気にしないでください。そういえば、もう明日出発するというのに、結局富岡さんは来ませんでしたね。先日手紙が届いていたと思いますが、何か言っていましたか？」

「えーと、それが『標的は”鬼舞辻”^{きぶつじ}だったが、急遽”女の鬼”を追うことになった』、『見舞いに行けず、すまない』の2言だけで……」

「うーん、富岡さんの言葉足らずは相変わらずですね」

いつもどおりしのぶさんは笑顔だが、その笑顔が怖い。

家族の埋葬や、話を聞いてもらったりお世話になったが、あの義勇さんが見舞いとか、いや、そもそも手紙とか書く人のようには思えない。

謝罪させにこさせるって言っていたし、どういう風に伝えているのだろうか。

「鬼舞辻は鬼を増やす原始の鬼——すなわち俺の最終目標だということとは、しのぶさんの説明で分かりました。ですが、鬼殺隊にとっても重要なそれを置いて追っている”女の鬼”とは、一体……？」

「知りません」

「え？」

「いえ、本当に知らないんですよ。“柱”である私のところにすら情報が来ていない。ひよっとしたら、その”女の鬼”というのは鬼舞辻につながる手がかりの様なもので、お屋形様が内密に富岡さんへお願ひしているのかもしれない」

お屋形様——鬼殺隊当主のことだろう。

全ての情報は彼のもとに集まり、そこから柱、一般隊員へと標的の情報が与えられるそうだ。

なんでも戦闘向きの人ではなくて、“鬼殺しの初代”のパトロンとして名をあげ、代々“呼吸の使い手”の手伝いをしているそうだ。

しかし、その関係は一方的なものではない。対等だ。

鬼殺隊は、鬼殺しも、この当主もお互いに信頼し、助け合っているからこそ何百年の間、誰かの明日を守るために戦い続けて来れたのだと。

「元柱で育手の鱗滝さんなら、富岡さんの師匠ですし何か知っているかもしれないね」

「なるほど、聞いてみることにします」

「熱心なのはいいことです。ついでに薬学も勉強していきますか？

徹夜で頑張れば基礎はできるかもしれませんがよ」

「ははは、またの機会にお願いします」

翌日。

ついに、この“蝶屋敷”を去る時が来た。

身体は回復し、傷痕は残っているが問題なく動く。

「いた！ おーい、カナヲ！」

「？」

「ありがとう。俺はもう出発するから、挨拶がしておきたくて」

「“嗣子”については改めて聞いたよ。すごいなカナヲは。俺と同じくらいの年なのに、実力が認められてここにいて。尊敬するよ。だから——」

「俺も必ずその域に辿り着く。これから鱗滝さんのところで修行して、“最終戦別”を越えて鬼殺しになる」

「俺も頑張るから、また会おう」

すると、カナヲは初めて話をした時のように、コインを取り出した。結局、このコインはどういうものなのだろう。

そして、またコインが宙を舞い、カナヲの手にパシんツと叩きつけられる。

「……どうでもいいの」

「指示されてないことは、これを投げて決める。今、あなたと話すか話さないか決めた」

「話さない」が表、「話す」が裏だった。裏が出たから話した。あの時も」

「……そっか。教えてくれてありがとう」

「さよなら」

「……ねえ、カナヲ。どうして自分で決めないの？」

「……」

「カナヲは、どうしたかった？」

「……全部どうでもいいから、自分で決められないの」

「この世にどうでもいいことなんてないと思うよ」

カナヲからはどこか悲しい匂いがした。

「カナヲは心の声が小さいんだろうな。うーん、指示に従うのも大切なことだけど」

「人間は可能性の塊だ」。俺も襦ねずこ豆子も、家族は皆そういう風に育てられてきた。だから——ちよつとそのコイン貸してくれる？」

放っておけない。

本音を見ようともせず、不本意も知らないで、求める未来を描かずわざわぎ心を我慢させ続けることのみを選択するのは、すなわちこの可能性の放棄だ。

お節介かもしれないが、見過ごしたくはなかった。

「えっ？ うん。あつ……」

「ありがとう。よし、投げて決めよう」

「何を？」

「カナヲがこれから、自分の心の声をよく聞くこと」

ピインと甲高い音とともに、コインが空高く舞い上がった。

飛ばし過ぎたかもしれない……

「表！ 表にしよう」

「表が出たら、カナヲは心そのままに生きる」

「わっ、あれ？ どこいった。おっとつと……」

なんとか落ちてくるそれを手で捕まえる。

「表だ——っ！」

「カナヲ、頑張れ！ 恐れず進め、道は拓く。」

勇気と気力と夢さえあれば大概なんとかなるものさ！

人はそういう心が原動力だから。

心はどこまでも強くなれる。

気合と根性は、あらゆる不可能を可能にする心の力だ。

「……」

「なっ、なんで——表を、出せたの？」

「偶然だよ。それに、裏が出てても表が出るまで何度でも投げ続けよう
と思ってたから」

キョトンとした表情だが、カナヲの悲しみの匂いは薄れていた。

きつと何か助けになれたのではと思う。

「じゃあ、元気で——」

こうして俺はただ刀を一本携え、

まずは彼の少女を越えるため、「育手」の鱗滝さんの元へ向かうの
だった。

第三話

鬼と鬼殺しの因縁は千年にも及ぶ。

しかし、長い歴史の中では紛失した文献の方が多く、全てが分かっているわけではない。

だが、大まかな流れだけでも知り、そこから現在を理解することが大切である。

そう蟲柱、胡蝶しのぶは語った。

それは”原初の鬼”と、それを滅するべく誰かのために立ち上がった英雄サムライから始まった血に濡れた宿命。

血を分け与えられ、増えていく不滅の鬼に対し、英雄は”呼吸”という個々人によつて千差万別される鬼殺しの技術を開拓し対抗する。しかし、年月には敵わない。

英雄は最期に理ことわりさえ超越した存在であると見せつけたものの、寿命に抗うことなく亡くなってしまう。

英雄とて人であるから限りある命しか持たないのだ。

とは言え、英雄譚はこれで終わりではない。

人から人へ想いを紡いでいくことこそ不滅であり、最も大切なこと。

大切な言葉と信念、そして”呼吸”は、個人を超えて広がっていく。例え英雄のような極大の光は失われても、

その背を見ただどこかの誰かに伝わって、勇気の拳は握りしめられる。

そうして受け継ぎし者たち——鬼殺隊。

その数およそ数百名。

政府から正式に認められていない組織。

だが、古より存在し続け今日も鬼を狩る。

鬼。

主食は人間。

人間を殺して、その血肉と臓腑を喰らう。

身体能力が高く、傷などもたちどころに治る。

切り落とされた肉も繋がり、手足を新たに生やすことも可能。体の形を変えたり、”血鬼術”と呼ばれる異能を持つ鬼もいる。太陽の光か、特別な刀”日輪刀”で頸を切り落とさない限り殺せない。

鬼殺隊は生身の身体で鬼に立ち向かう。

人であるから傷の治りも遅く、失った手足が元に戻ることはない。それでも、彼らは戦い抜く。

誰かの明日を守るために。

一方、最初に抱いた俺の原動力は彼らのように大層なものではなかった。

ただ、失った家族の敵を討つこと。

刺し違えてでもという、身を厭わない復讐心だ。

だから、家族を失なった直後、誰とも会うことがなかったなら、この流れの末裔を志すことはなかっただろう。

そんな俺を変えたのは水柱、富岡義勇との邂逅だ。

第一声は、この言葉だった。

『泣くな。絶望するな。』

そんなことは今することじゃない』

かつての生活は楽じゃないけど、幸せだった。

しかし、人生には移ろって動いていく空模様がある。

ずっと晴れることはないし、ずっと雪が降り続けることもない。

そして幸せが壊れるときには、血の“匂い”がするのだ。

そう、何の前触れもなく、唐突に家族を皆失った。

俺が街に炭を売りに行つて留守にしている間に、鬼に家族を皆殺しにされた。

もう、話すことも触れ合うこともできない。

ただ、その事実には絶望する。

だが——ふざけるな、認められるか。

母ちゃん、花子、竹雄、茂、六太——そして禰豆子。

お前たちが殺される理由なんてなかった。

何も悪いことなどはしていない。

なぜ。どうして、こんなことが許されるッ！

その嘆きの果てに凝縮していく呪い、怒り。

一言でいえば、憎しみに支配され復讐しか考えられなかった。

彼はそんな俺の目の前にやってきた。

『お前が打ちのめされているのはわかっている。家族を殺され、妹は鬼の血を受け入れることも拒むこともできず、再生と死を繰り返す果てに停止した。つらいだろう。叫び出したいだろう。わかるよ。俺があと半日早く来ていれば、お前の家族は死んでなかったかもしれない』

『しかし時を巻いて戻す術はない。そうだ、怒れ。許せないという強く純粹な怒りは、手足を動かすための揺るぎない原動力になる。脆弱な覚悟では家族の仇を討つことも、地獄の先に笑顔を取り戻すこともできやしない』

狂い哭く先に聞いたのは、義勇さんの地獄の先に笑顔を取り戻せという強い言葉だった。

そうだ。

復讐に囚われてはいけない。

それだけでは、何も生まないのだから。

その地獄の先に笑顔の花が咲くことを証明して見せなければならぬのだ。

この衝動の行きつく先、悪鬼滅殺は過程に過ぎない。

それに全て捧げるだけだなんて、それこそ死んだ家族に顔向け出来ない。

そうして俺は、覚悟を決める。

『俺の仕事は鬼を斬ることだ。もしお前が望むなら、狭霧山の麓に住んでいる鱗瀧左近次という老人を訪ねろ。富岡義勇に言われて来たと言え』

それで鬼殺しの手段が手に入るのなら。

是非もなければ斯くやあらん。

必ず成し遂げよう。

悪鬼滅殺の彼方に、優しい明日があると信じて。

「試すのは、今からだ」

俺が鱗滝うろこたきさんの家に着いたのは、もう日が沈んでずいぶん経った頃だった。

教えられた場所に向かうと、天狗の面をつけた老人が一人佇んでいた。

「お前は、突破”して、”受け継ぐ”ことが出来るのか見せてもらう
「はい—」

いきなりそういわれたものの、本来であればもう到着し修行する
とができていたのだ。

俺は疲れていたし体を休めたいという気持ちもあったが、この程度
で根は上げられない。

それに——覚悟はどうに決まっている。

「儂と同じく、”鼻”が効くそうだな」

「はい、”匂い”が分かりますが……?」

「よし。では荷物は預かる。刀も今は預かる。ここに置くといい」
なぜわざわざ”鼻”が効くかどうかを尋ねたのだろう。

それに刀も含みがある言い方だ。

いや、今考えることじゃない。

待たせてはいけないし、早く荷物を置こう。

「では、ついていこ」

「っ!?!」

はい!

俺が荷物を置くや否や、予兆すらなくいきなり爆発したかのように
走り出した。

向かう先は、この目の前の木々が生い茂る山の中か。
いけない。

月明かりがなくてとても暗く、よく見えないから見失ってしまう。
急いで追い着こう。

だが、やはり完全に追いつくには至らない。

俺は山育ちだし、病み上がりとはいえ蝶屋敷でも傷が開かない程度の軽度な筋トレは怠らなかつた。

すばしっこさという点でも、鱗滝さんは身長が高いし体も大きいから避けなければならぬ木々などの障害物も多いが、俺は小さい分、鱗滝さんより避けるとう動作で速度を殺す回数が少ない。

では、俺と鱗滝さんは何が違うのだろう。

「ハア……ハア……」

ああ、そうか。

この山は――

「ハア、ハア……くツ」

空気が薄い。

ただの呼吸だけで、胸が苦しい。

「くつ、はっ……」

だめだ、呼吸を正せ。

意識しろ。

「スウ、スっ……はっ、はっ」

そう、とにかく苦しいときは“呼吸”だ。

それで俺は一度、命を救われている。

灰いっぱいに空気を吸い込み、そこから細胞の隅々まで酸素を行き渡らせるような感じで。

そうだ。

体が熱くなってきた。

鈍かった動きにキレが出る。

そして、ムダに力が入っているところも分かってきた。

山登りはまだ続く。

鱗滝さんも……よし、ちゃんと追えている。

大丈夫だ、この調子。

「――」

おい、なんだこれ。

力が急に入らない。

そうか、さらに空気が薄くなっているのか。
足りない。

もつと、呼吸を整えろ。

正しい呼吸を目指すんだ。

しまった、鱗滝さんにだいぶ離されてしまった。

しかも、鱗滝さんはさらにスピードを上げている。

ありえない。

こんななに、苦しいのに。

先ほどまで余裕で避けれていた木々の枝や、地面に足を取られてしまっている。

集中しろ。

こんなところで、終われない。

なぜなら俺は、鬼殺しを完遂し、笑顔を取り戻すと誓ったのだから。

……

……

……

——木々が開ける。

どうやらゴールのようだ。

俺はなんとか持ち直し、ここまで辿り着くことができた。

「ぜえ、はあ……すう、ハア……」

俺は満身創痍で、足がガクガクと震えて止まらない。

対して鱗滝さんは、息一つ切らしていない。

月並みな感想だが、すごい。

俺は——分かつてはいたが、まだ全然だ。

しかし、目指す理想が遥か高いにせよ、それに至るまでまだまだ鍛えられると確信している。

頑張ろう。

「炭治郎、〃 全集中の呼吸〃とはなんだ？」

いきなりの質問に驚いた。

だが、その呼吸の一端でもつかめていなければ、俺はここまで登ってくることは出来なかっただろう。

思えば、初めて鬼と戦って死にかけた時、止血のために呼吸もどきを成功させたのを鱗滝さんは知っている。

この“山登り”は、俺の“呼吸”についての理解を試すものなのだろう。

「えっと、“全集中の呼吸”は、一度に大量の酸素を血中に取り込むことで、瞬間的に身体能力を大幅に上昇させます。しかし、相応の負荷を使用者にかけます」

“全集中の呼吸”は体中の血の巡りと心臓の鼓動を速くする。

そして、体温が上げきったとき、人間のまま鬼のように強くなれる。とにかく肺を大きくする。

血の中にたくさんの空気を取り込んで、血が吃驚したとき骨と筋肉が熱くなつて強くなる。

会得するには、死ぬほど鍛える。

それしかない。

また、それを24時間、常にできるようになたつ時こそ“柱”に一歩近づけるのだと。

そうしのぶさんに教わった。

「ふむ、蟲柱に基本の知識は習ったか。だが、お前は知識としてそれを覚えただけで、体は慣れていない。それで全集中“常中”は不可能だろう」

た、確かに。

俺は蝶屋敷に運ばれるときと、この山登りでしか使えていない。

そもそも“呼吸”が正しくできていたのかさえ不安になってきた。

「今はできなくて当然だ。儂がこれからそういつた技術や鍛錬の方法を教えよう。あとはお前次第だ。お前が儂の教えたことを昇華できるかどうか」

「はい！ よろしくお願いします！」

こうして、俺の試練は始まった。

後で振り返るため、記録をつけておこうと思う。

繰り返しようだが、鍛錬の場は酸素の薄い山の中。

これは俺の住んでいた山よりもっと標高が高い位置にある。

そんな中を駆け上がり、駆け下り、跳んで跳ねて仕掛けられた罠を越える。

言葉にすれば愉快に見える一方、おそろしくしんどい。

そして罠は文字通り殺しに来る。

一時でも意識の集中を欠けば死が待っている。

その罠の数は日に日に増え、しかし絶妙に俺が死なない難易度というのが質が悪い。

だが、ここで鱗滝さんに再会したときに言われた、“鼻”が生きただけで分かるのだ。

人が仕掛けた罠というものが。

それに気づけたおかげで、だいぶマシにはなってきた。

そうして繰り返し返すうち、肌すれすれで避けたり、あるいは完全に回避したりできるようになった。

……と、鱗滝さんに嬉しそうに語ったら、鱗滝さんも嬉しそうであつた。

そして刀を無言でスツと出してくる。

俺が持ってきた“ただの刀”だ。

ん、どうということですか……？

え、刀持って周回……ですか？

次の修行であつた。

“今は”刀を預かるとは、こういうことだったのだろう。

この長物、走るうえではとにかく邪魔であつた。

重いし、木々に引つかかるのはで煩わしいことこの上ない。

同じ山を走り回っているはずなのに、難易度が一気に上がっていた。

しかし、それでも修業としてこなさねばならない。

むしろ、この程度で根を上げるわけにはいかない。

必ず俺は成し遂げる。

これまでで鍛え上げた体力、気力、集中力——文字通り、全てを尽くして乗り切った。

しかしこれは基礎体力作りに他ならない。

これより刀の扱い方——技術についてだ。

まずは素振り。

次に素振り。

最後も素振り。

そして刀を持った時の転がり方を身をもって体得し、ついに鱗滝さんの模擬実戦も行った。

素手の鱗滝さんに対して、俺はただの刀を持つ。

素手対真剣。

勝負になんてならないはずだった。

でも転がされる。

勝てない。

これが“技量”が足りないということなのだと教えられた。

そして“呼吸法”や“型”のようなものも学んだ。

これが、全集中“水の呼吸”。

鬼殺しの技だ。

決して忘れないよう、骨の髄まで覚えこませるため、繰り返し繰り返し鍛錬する。

何度も何度も、そう何度も。

時間が許す限り。

そして、“ある事”にも挑戦する。

あれから半年。

「……もはや教えることはない」

俺は、徹底的に鍛え上げた。

かつて、呼吸を解せず技を使って体を痛めたが、そんな無様をさらすことはもうないだろう。

この修行の期間、体も技術も努力し、一心不乱に鍛えぬいた。とはいえ、まだまだ足りないと感じてる部分も多い。

「いえ、足りません！」

そう、“ある事”がまだできていない。

岩が斬れるほど剣技が上達しても、それがなければ柱に——すなわち、より上位の鬼と戦うことができない。

だから、まだ終わるわけにはいかない。

「もう、ないのだ」

「いえ、まだです！」

「炭治郎、よく聞け。教えることはもう——」

「——まだです！」

それでも、食い下がる。

そして、その訳を——俺は“ある事”について相談した。

蟲柱から聞いていたそれを。

「うむ……ならば許可しよう」

無理やりだが、納得してもらった。

そして一年弱。

結論から言えば、俺はまだ得られていなかった。

「岩を斬れても、全集中”常中”じょうちゆうまで至れませんでした……」

“ある事”とは、“常中”である。

“常中”は全集中の呼吸の先にあり、柱ならば誰しもできることという。

当然、鱗滝さんも元柱がゆえ、できる人だ。

そして俺は、常中まで至れず、そんな鱗滝さんに合格を貰った。

いや、無理やり言い渡されたといってもいいだろう。

なぜなら、これ以上同じ場でとどまっても意味がないからだ。

俺の目的は鬼殺しであるから、それが進まないのは言うまでもない。そして、人間は“慣れる”ものだ。これが厄介で、現状の環境に慣れてしまったが故、これ以上は急激な成長は見込めないだろうという鱗滝さんの判断だ。

「“常中”は極意だ。焦らずとも良い。この場でくすぶっていても、

お前の成長にはならん」

鱗滝さんは親切にそう言うが、齒がゆい気持ちはある。

人間は可能性の塊だ。

そんな、我が家に伝わる頼もしい言葉を誇っているが故、くやしいという気持ちは大きい。

それでも、常中まで至った尊敬する師匠の言葉だ。

これ以上の説得力はなく、俺はここでの修業を打ち切ることに決めた。

「ありがとうございます……分かりました」

「うむ」

この後、修行の終了ということで鱗滝さんとたわいのない話に明け暮れた。

いろいろと振り返ることは多い。

しかし、ふとこれからのことに思いをはせると、一つ思い出したことがあった。

「……そういえば、鍛錬に没頭しすぎていて聞くのを忘れたのですが、義勇さんが“女の鬼”を追っていると言っていたのですが、何か知っていますか?」

「“女の鬼”か……義勇はそう言っていたのだな?」

どうやら、義勇さんが何をしているのか詳しくは鱗滝さんも知らないらしい。

いくら元“柱”であり、義勇さんの“育手”であっても、鬼殺隊の最高戦力である“柱”の動きはあまり知ることができないし、そもそも柱も何の任務に就いているかはあまり語ることはないそうだ。

むしろ、意図的に秘密になっている部分もあるという。

確かに、事前に柱が動くと情報が流れてしまえば、何かの拍子に鬼に知れ渡り、逃げられてしまうこともあり得るから納得だ。

「“女の鬼”と関係があるかはわからんが、少し前に“鬼喰い”を見たという噂をよく耳にした。鬼が共食いなどよほどのことがない限りはないためよく覚えている。しかも喰らっているのが単一の鬼となれば尚更だ。これが“女の鬼”だとしたら、姿を捉えられない

鬼舞辻^{きぶつじ}より、身近な手掛かりとして義勇が動くのも領ける」

“鬼喰い”。

鬼は鬼舞辻の呪いによってある程度統率されている。

確かに、状況にはよるかもしれないが、そんな中いたずらに戦力を削るようなまねをするわけがない。

確かにこれは奇怪だ。

なぜそんなことをする鬼がいるのだろうか。

いずれソイツも殺すにせよ、少々気にはなった。

「そうだ、鍛錬の中で折れてしまった刀は預かろう。いつまでも持っているものではない。主^{あるじ}の助けになったこいつも本望だろう。そして——これを持っていけ」

その刀は一言でいえばとても美しかった。

鞘から滑らかに引き抜かれ、その水色の刀身は鈍く俺の姿を映し出していた。

そこには、修行中の髪がぼうぼうになった姿ではなく、きちんと髪を切り、整え、1年前よりはるかに体格が良くなった俺がいた。

そして、ほんのりとだがこの刀からは血の匂いがする。

「儂の日輪刀だ。最終選別を終えれば、炭治郎専用の刀も支給される。必ず突破し、生きて返しにこい」

「はいー」

最終戦別に向けて、ここでやれることはやりきったのだ。

多少思うところはあれど、総合的には誤差の範囲に収まっている。

呼吸は、鱗滝さんの指導と空気の薄い山で走り回ったお陰で技能として身に付いたし、“水の呼吸”という型も、もはや呼吸という本質を捉えた今、完全に鬼殺しの技術として確立させた。

これからは、その先にある“常中”が一つの目標だ。

体も、毎日の素振りや山を駆け回ったため鍛わっている。

特にこれは、“呼吸”が出来ても体ができていなければ耐えきれず、破滅が待っているだけだ。だから、本気で鍛え抜いた自信がある。

加えて、心も万全だ。

憎しみは捨てない。

奴らを決して許さない。

怒りを燃やして殺し尽くそう。

ただの一人も逃がしはしない。

こうして心技体が揃った。

これにてようやく、ようやくなのだ。

「鱗滝さん、行つてきますー！」

こうして早朝、俺は最終戦別の舞台に向かう。

鱗滝さんの“刀”と、厄除けとして貰った“狐の面”を身に付けて。

第四話

「生きものがない……う？」

最終選別が行われる藤襲山。ふじかさねやま

咲く時期ではない藤の花に包まれ、独特の雰囲気醸し出していたそれは、一步踏み込めばこの通り。

日中でも生い茂る木々で日光が遮られ、まさに試験に使われるような鬼を飼い殺す牢獄となっていた。

そこには、木々が生い茂る森にいてしかるべき、蟲の羽音や鳥の鳴き声、すなわち生命の気配が失われている。

「……いや、この”匂い”」

だが——そう、鬼を除いて。

炭治郎は今、最終戦別の最中だ。

『この中で7日間生き抜く』ことが最終戦別の突破条件。

それを越えた者のみ、鬼殺しの一員と認められる。

炭治郎は慎重に進んでいく。

先ほどからただの木々が続くばかり。

しかし鳥の鳴き声や、虫の気配さえまるでないにも関わらず、彼の嗅覚は鬼の”匂い”だけは強烈に漂ってくるのを感じていた。

(どこかにはいるんだろうな……)

炭治郎は一度立ち止まって周囲を伺ってはみるが、何かを見つけたことはできなかった。

それでも刀をそつと抜刀し、体の正面に構える。

しばらくして、何も動きがないことを確認すると、ゆっくりと慎重に足を進んでいく。

この場においても、炭治郎の目的は一つだ。

生き抜くなどは前提に過ぎない。

ただ鬼を殺す。

試験のために用意された鬼だとしても、それは変わらないのだ。

「……！」

大きな鬼がいた。

炭治郎の顔を大きな鬼が通り過ぎていく。
どうやら気づいてはいない様子で、のしのしとそのまま歩いていっ
た。

チャンスだ。

炭治郎は静かに後をつけ、距離を縮める。

ついに刀の間合いまで後一步だ。

(このまま——いやッ!?)

何かが近づいてくる。

そう感じ、炭治郎はすぐさまその場を飛びのく。

絶好の機会であることは間違いない。

しかしその音で目の前の鬼に気付かれてしまうとしても、炭治郎は
直感の方を信じた。

すると、目の前に凶悪なナニカが掠めた。

それは一つではなく沢山であり、目にも止まらない程の鋭い連撃
だ。

恐らくそのまま目の前の鬼に氣をとられていたら、炭治郎はそのナ
ニカで引き裂かれていたことだろう。

現に先ほどまで炭治郎が息をひそめていた大木には、その余波だろ
うか、不自然にいくつもの小さな傷痕が残されていた。

「ふぎけるなよ、どうして避けられる?」

落ちてきた鬼が憎らしげに睨みつけながらそう呟く。

先の不意の連撃に相当な自信があったらしい。

見れば、その鬼は小柄ながらも、腕の先には凶悪な爪が十本伸びて
いた。

これがナニカの正体であろう。

そしてなるほど。

この爪で不意打ちならば、その広い攻撃範囲も相まって、炭治郎が
肉団子になるのが普通であっただろう。

それを直感で感じ取り、無理やり身体をひねらせ生存の道を掴み
取った炭治郎に対して、落ちてきた鬼の驚きは至極当然と言えよう。

(木の上にあった……そうか、一匹だけじゃない。尾行されていたのは

俺の方だったのか)

ただ、本人に窮地を脱したその自覚はない。

だが、隠密性、不意を打つという狡猾さなど、炭治郎は遅まきながら、目の前の鬼に気をとられたが故に死の間際に立っていたということとは実感し、冷汗を背に伝わっていた。

彼の心臓も、今までにないほどバクバクと波打っている。

「なあ、聞いてるか？」

「……たまたまさ。でも、人間なら——気合と根性があれば誰でもできるんじゃないか？」

「そうか、人間なら、ねえ……ふん、まあいい。死ね」

鬼は、どこか不愉快そうな様子を一瞬見せるも、すぐに捕食者としての在り方を思い出したようだ。

鬼は距離を詰めながら爪を構えた。

炭治郎はそこから繰り出された連撃を、とっさに構えた刃で受け止め続ける。

弾き、逸らし、受け止め、時には身体ごとずらして避ける。

この小さな鬼の一発一発は、十本の爪から繰り出される連撃であれど、そう重くはない。

多少掠り、炭治郎の肌を傷つけはするものの問題なく対処はできていた。

だが、それに紛れる鋭い一撃。

これが厄介であり、より精度を上げて命を奪わんと襲ってくる。

そう、小さな鬼は回数を重ねるごとに癖を読み、追い詰め、キレが増していき、着々と炭治郎の死へのカウントダウンが進んでいるのだ。

「まだだッ」

しかし炭治郎もやられっぱなしではない。

鱗滝のところで修行した一年弱。

かつて、廃寺で鬼と戦った時より強くなっている。

それは技術面でも、体力面でもそうだ。

加えて、今は鱗滝の“日輪刀”がある。

殺す手段がなく、絶望に打ちのめされたあの時とはもう違うのだ。
「むっ？」

炭治郎の刃が鬼の防御を突破し、腕に浅く傷を着けた。

鬼はすぐに傷は治ってしまうが、修行にて実力を身につけた証拠であつた。

「中々いい筋をしている。俺の連撃に対応する奴はそうそういないからな」

「お前の攻撃は軽い。そして軽いだけなら——」

「ふむ」

炭治郎は全てを捌く。

着実に。

そして隙をうかがい、繰り返し狙っていく。

落ち着け、焦るなど言い聞かせながら。

そして——

(そう、いまだ！)

炭治郎はついに頸くびを落とさんと刃を振るう。

しかし、鬼は一体ではない。

そして当然、1vs1ダイマンで戦ってくれるなど期待するのは愚かだろ
う。

すなわち——

「おい、てめえ。俺をおとりにしやがったな？」

(——ッ！)

そう、愚かさの代償。

最初に暗殺しようとした大きな鬼、認識外から振るわれた大柄なそれの一撃を炭治郎はノーガードで受けることになった。

「あガッ!？」

その鬼の一撃は重い。

目の前の軽い一撃を連続で繰り返すのと違い、最初の鬼はとにかく
重いのだ。

炭治郎は遠くに飛ばされる。

「はあ……気付かない貴様が悪いだろう」

「ふぎけるな、そのガキ共々殺してやる」

「鬼で争ってどうするよ、決着がつかん。まあ、足の一二本折って転がしておけば、久しくヒトを喰ってない鬼が喰ってくれるか」

「上等だ、やってみらあー!」

大きな鬼と、小さな鬼は言い争っている。

だが、その目はお互いに向いておらず、ただ炭治郎に絞られていた。

炭治郎は、苦痛に耐える。

「グっ、お前たちは……」 共喰い “ するのかわ? ”

炭治郎はふらふらと立ち上がり、鬼に問うた。

「……? ああ、さつきはそのように言ったが、普通喰うわけないだろ。消耗するだけってのがオチだ。長く喰わなくても死にはしないしな。まあ、よっぽど空腹なら別かもしれないが……」

(やはり、“女の鬼”は特別なのか)

「オイオイ、腹減ってないならためえは向こうに行け。俺がコイツを喰う」

「何言ってるんだ? それを言うなら貴様が失せろ。結果的には助けてやったんだから」

「知るか、俺の獲物だぞ」

「黙れ——いや、もういい。先に殺った方が喰えばいいだろうが」

「おう、そうだな。久方ぶりの人肉だア!」

小さな鬼の目線は、炭治郎の“狐の面”をチラリと見た後、そう答えた。

そんなことに、大きな鬼は気付かない。

「くッ! まだだ」

「応とも、まだまだア! さっさとくたばれ、このガキイイ!」

大きな鬼は重い。

炭治郎より身体が一回り大きいからか、その肥大化した腕から繰り出される薙ぎ払いは、動作は遅いながらも、しかし破壊力は抜群であった。

腕が振れた先に在った木々は粉碎、あるいはへし折られ、地面にどさりと崩れ落ちる。

こんなものに人間が掠りでもすれば、ただでは済まないだろう。「やはり殺されるまで待つておけばよかったな……しかたない」

対して、小さな鬼は軽い。

身体は小さく、先に述べたように鋭い爪が連続で炭治郎に襲い掛かる。

まるで繰り出されるごとに調整しているかのように、速度と精度が上がり続けるそれは、確実に炭治郎に小さな傷を増やしていく。

このまま戦い続けてもジリ貧であることは明白であった。

「くそっ！ それでも、まだだ！」

炭治郎は勇気をふり絞り二匹の鬼に立ち向かう。

しかし、二匹の鬼はいずれにせよ総合力が高い。

重いとは言え炭治郎より速いし、軽いとはいえ炭治郎より力強い。

鬼は、ただの雑兵でさえ人間のスペックを越えている。

これが高位の者なら言わずもがな。

さらにはそんな化け物が二匹同時に炭治郎へ襲い掛かっているのだ。

「そいつの一撃は重いし、避けるのが正解だ。そして俺の攻撃は繋ぎが強みだ。かわし、弾き、受け止めるなんてすれば細切れだ。いい判断だよ、ほんと」

「ごちやごちやうるせえな。てめえはどっちの味方だよ」

「どっち？ 馬鹿なことをいう。俺自身の味方に決まっているだろう」

そう会話を交わし、鬼たちはおぞましく笑ったかと思うと、また戦場の支配権は元に戻る。

立ち向かつてはいるものの、炭治郎はなんとかしのぐので精一杯だ。

それもそのはず。

二匹の鬼はお互いがお互いに攻撃が当たったとしても気にもせず、炭治郎を狙い続けているのだから。

別にお互いが傷ついても構わない。

どちらがとどめを刺しても構わない。

なぜなら、最後に立っている側が喰えばいいだけのこと。
鬼たちは、ただそれだを考え、本来ならあり得ない共闘という状態
が発生していた。

これに対し、炭治郎は依然変わらず一人で挑む。

「さすがは“狐の面”だな」

「あ？ “狐の面”がどうしたってんだよ」

「アイツが大好きな奴ってことさ。わかるだろ？」

「何言ってるんだおまえ？」

「はあ……お前はここに落とされて短いようだな。ついでに、鬼に
なつてからも短いか。なら知らなくても無理はない」

「あん？ 気に入らねえな、なんだその態度」

「だいたい、ここに試験だなんて遠足気分で来る奴らはゴミだ。ただ
刀が振るえる程度のな。だが、コイツは違う。“狐の面”の奴らは大
体育ちがいいが——とりわけコイツはできる子だ。まともに鬼と
戦ったこともあるんだろう。ヴィジョンを持って殺しに来ている」
「くだらねえな。どうでもいい」

「……そうか、それが命取りにならないといいな」

このままでは死を待つのみだ。

しかし——

（鬼は、こちらに攻撃してくるが喧嘩するとき少しゆるむ。それも、隙
も見つけた……けど、踏み込むだけの力が足りない）

向こうが慣れてきたように、炭治郎も慣れ、鬼の“癖”を見抜き始
めていた。

例えば、小さい鬼は手数が多いが一撃が軽い分、繋げること意識
している。だから、大きな鬼に攻撃が吸われるといい顔をしない。

対して、大きな鬼は小さな鬼に御構い無しに、当たれば儲けものと
大ぶりの攻撃ばかりだ。

ならば、大きな鬼の雑な攻撃の影に隠れ小さな鬼の攻撃を掠らせれ
ばムリに全てを受ける必要はない。

しかし、鬼の総合力は人間のそれを越えている。

持久力、筋力、素早さ、反射速度 e t c ……

繰り返すが、重いとは言え炭治郎より速いし、軽いとはいえ炭治郎より力強い。

現状、炭治郎が優っているのは、その精神だけだ。

つまり、決定打にかけている。

(でも、総合力が負けているのなら……人が鬼に敵わないと言うのならばッ！)

だが、忘れてはいけない。

そんな化け物に対して、英雄は——鬼殺隊は、何を継承して来たのかを。

(そう、人だからこそその可能性を、今ここに——全集中！)

そう、これを以て様子見はもう終わりだと、炭治郎は地を這う四足の獣が如く疾走を開始した。

「何、当たらない……？ どういうことだ？ いや、まさか使っていないのかっただのか!？」

「ははっ、面白れえ！ 俺の重さと張り合うか！」

小さな鬼は警戒するが、大きな鬼はそのまま突っ込んでくる。

「まだだ」

その炭治郎が発した決意の言葉と共に、大きな鬼は吹き飛んだ。

細胞一つ一つまで酸素を取り込み、限界まで肉体を強化し鬼に迫った人間は、総合力で雑魚の鬼など凌駕する。

もはや、ずさんな大ぶりでは捕えられない。

「くそ、そろそろ喰わせろやあー！」

鬼はそう喚きながら、再び突撃してくる。

そう、頸を落とさねば、鬼は死なない。

「そうだな、呼吸なしにあそこまでとは——完全に予想外だ。お前を脅威と判断した。このまま殺す」

そして、それに便乗して小さな鬼も動き出す。

本能的に悟ったのだ。自身の優位性など存在しない。局面は、目の前のヒトが支配していると。

ゆえに、合わせる。

大きな鬼の大ぶりの一撃に乗って、そのまま炭治郎に肉薄する。

「ああ、俺もさ。必ず遂げると誓ったんだ」

だが、大きな鬼の腕を伝って小さな鬼が襲てくるという異常事態。そんな中でも炭治郎は冷静であった。

「なに!？」

小さな鬼は目の前に起きた出来事が信じられない。

一瞬の邂逅の後、腕が落ちた。

爪はもはや振るえない。

「くそがああああ」

大きな鬼も、同じ手など通じるわけもない。

逸らされ、切られ、有り余った力は地面に吸われた。

そして、二匹の鬼が体勢を立て直す前に――

(見えた、隙の糸ツ)

隙の糸。

確実に殺せるという状況に持ち込んだ時、炭治郎が見るそれは、今まさに刀の先から二匹の鬼の頸に繋がっていた。

ならば、鬼殺しを取る行動は一つ。

「水の呼吸――」

“呼吸”を解した炭治郎に迷いはない。

ただ、廃寺の鬼との戦闘の後、これまで鍛え上げた技を放つだけだ。

「肆しの型、打ち潮」

「ばか、なツ!？」

「ありえん……」

結末は、一瞬であった。

鬼の頸は二匹とも両断され、地面にごとりと4つの塊が落下した。

「うっ……ふう……」

炭治郎は呼吸を整える。

ともあれ炭治郎は、鬼殺しを為したのだ。

それを認識すると、炭治郎に今まで張りつめていたせいで感じなかった痛みや疲労がまとめてやってきた。

そして、そのまま休息をとろうと近くの大木にもたれかかろうとする――

「や……やるじゃないか」

「ッ!？」

そこで、炭治郎は跳ねるように振り向いた。

そこには、灰になりかけの鬼がいる。

小さな鬼の方だ。

わかれた胴体はほぼ全体が灰に侵されているが、頭の炭化は遅い。

もう一方の、大きな鬼はすでに事切れ、完全に灰になった様子だ。

そのように状況を素早く確認し、炭治郎は出したままの刀を再び構

え直した。

「しぶといんだな」

「あいにく特別性でね……まあ、頸を斬られた以上、もう死ぬさ——だが」

警戒し、疑いのまなざしを向ける炭治郎に対し、鬼の目はすでに輝きを失っていた。

炭治郎が見えているかどうかもあやしい。

目の前で、全体的に炭化が進んでいく。

「くつくつく。さあ、来るぞ」

「なに？」

「アイツが……檻の主が——」

何か伝え切る前に、今にも朽ちようとしていた小さな鬼だったモノが目の前で爆ぜた。

腕の様なものに潰されて。

「見つけたぞ。俺の可愛い子狐よ」

その押しつぶした大きな手の間から、灰がひらひらと舞う。

それに伝うように、とてつもなく強大な気配を感じ、炭治郎は反射

的にそちらの方へ顔を上げた。

「——ッ!？」

そこにいたのは、大型の異形。

腕が無数に生えた化け物であった。

(馬鹿な、この距離まで気付かなかった!?)

炭治郎は、疲労した体に鞭打って素早く飛びのく。

対して、その異形は特に反応することなく、その腕でがっちり覆われ、ただ唯一見える双眸で炭治郎を捉えて離さなかった。

(これが先の鬼が言っていた——檻の主、なのか……)

大きさは、先ほどの大きな鬼よりかなりデカイ。

その無数の腕は、一部巻きつく用意して頭や頸に巻きついていてる。

間違いなく、沢山人を喰って強くなった鬼だ。

そんな鬼を前にして炭治郎は——

「いいだろう。悪鬼滅殺——滅ぼし尽くしてやろう」

「おお、活きがいい。そうでなくてはなあ!!!」

(体力もキツイ、速攻決めるッ!)

こんな化け物は見過ごせない。

ただそんな思いを胸に、刀を再び握りしめ挑んでいく。

炭治郎は、まさか二匹の鬼を殺した自分が、このまま敵わないとは思っていない。

悪鬼滅殺。

滅ぼしつくせると信じているのだ。

だが、しかし——

——“狐の面”が割れる。

「あ……あれ?」

俺は、その碎け散った破片の前で地にはいつくばっている。

呆けるな。

何があつた、思い出せ。

俺は——そう、刀を振り上げ、全集中の呼吸を使いながら、水の呼吸で戦った。

そして、小さな鬼と大きな鬼と闘い、頸を落とした。

でも、その先に——コイツ。

檻の主に立ち向かったんだ。

コイツはただ純粹に強い。

この檻の中で凝縮された蟲毒のようなコイツは、一線を画かくしていた。

でかい図体だけあって、速さはない。

しかし、それを補う攻撃範囲、手数、そして力強さ。

呼吸で強化した俺の攻撃はどれも効かなくて。

技も、ただの“腕”を切り落とすのに精いっぱいだ。

頸には届かない。

しばらく全力で戦ったが、光明は見えなかった。

ズキリと大きな鬼に不意に貰った攻撃が痛む。

そうだ、あの大きな鬼も、小さな鬼も圧倒できたわけではない。

そして、土の中から鬼の匂いを感じ、そのまま飛び上がったなら、そのまま……

二匹の鬼に貰ったダメージのおかげで、ついに避けることもできず、地面に叩きつけられた。

「フフフフ、フフフツ」

鬼は、嗤っている。

いや、馬鹿な。

このまま終われない。

認められるか、そんなもの。

俺は、刀に体重を掛けるようにしてフラリフラリと立ち上がる。

もはや、残ったスタミナもわずかであるし、傷だらけでこうして立つだけでも覚束ない。

「俺の頸の守りは硬いから切れない。口元に傷がある狐小僧でも切れなかった」

ああ、そうだ。

硬くて切れない。

そもそも、どうして俺は無策に突っ込むことしかできなかつたのだ。

疲労やけがの程度を無視して、勢いだけで殺せる？

速攻挑めば、流れでそのまま殺せる？

そんなわけがない。

浮かれているにもほどがあるだろう。

俺は、馬鹿だった。

「あの女のガキみたいに、手足を引きちぎってそれから——喰ってやるよ」

鬼は、じわりじわりと近づいてくる。

とうとう技も出し切り、どれも通じず、総ての手を尽くして絶体絶命の窮地に陥った。

逃げることは叶わないし、逃げるつもりもない。

俺が取るべき選択はそんなものではない。

鬼殺し完遂の先に、笑顔の花を咲かせるため。

鬼の死骸を敷き詰めて、煌めく花卉と灰の舞う道をこの手で必ず造り出す。

だから俺は——

それは、単なる決意の表明。

気合と根性、それ一つにより起こされる不条理。

そう、悪鬼滅殺を渴望するのならば、この局面で選ぶのは当然この選択しかあり得ない。

第五話

「男を殺せ。女を殺せ。老婆を殺せ。赤子を殺せ。犬を殺し、牛馬を殺し、驢馬を殺し、山羊を殺せ——フフ、フフフフ」

悪鬼滅殺——すべての鬼を滅ぼしつくす。

そして、笑顔を取り戻すんだ。

鬼の死骸を敷き詰めて、煌めく花卉と灰の舞う道をこの手で必ず造り出す。

「——そう、まだだッ！」

それを阻むというのなら、是非もなければ斯くやあらん。

あらゆる森羅万象を真つ向から踏み躪ろうとも、無謬の光輝で焼き払おう。

故に——再び立ち向かう。

「フツ、フツフツ——意味がない。ムダ。不毛。無意味で無価値。なぜ立ち上がる？ そんな折れた刀でなんとする？」

「俺は決して揺らがない……おまえを砕き、そして勝つ。鬼どもを滅ぼしつくすために」

「そんな、押せば倒れそうな姿でか？ 俺に立ち向かうのか？ 今頭を垂れるなら、苦痛なく殺してやるぞ？」

「悪いが後が控えている。それはできない相談だ」

「——ああ、いいぞ。やはり狐のガキは違う。ならば望み通り、存分に弄ってやろう。フフウフフ」

鱗滝の弟子は皆殺しだ、そう鬼は言い放ち、俺に向かって無数の攻撃で押しつぶそうとしてくる。

言うまでもない。

数は、すなわち力だ。

腕を無数にはやした鬼は、文字通り手数が違う。

対する俺は小さな腕が二本だけ。

そして握られた刀は、二匹の鬼と殺しあった損傷も加わり、先のこの目の前の鬼との戦闘で、刀身半ばからポキリと折れてしまっている。

一方、折れた先は、鬼の頸くびに刺さっている。

そこにも腕が巻かれており、鬼の頸は無数の腕の一部が守っているため貫通はしていない。

そして、身体の傷もうずく。

致命傷こそ貰ってははいないものの、度重なる打撃で内臓はぐちゃぐちゃにかき回されているだろう。何度血反吐を吐いたことか。

長期戦になれば、回復できないこちらが不利なのは明白だ。

だが――

「なに?」

奪われたものは、奪い返さねばならない。

涙も、嘆きも、痛みも、皆すべて、希望ヒカリで焼き尽くしてやるべきだ。

「俺の腕が斬り伏せられただど?」

そして地獄の先にも花は咲く事を、人は陽だまりに辿り着けるといふ事を、証明してみせる。

「いやはや、たかが数本。これには勝てんだろう? 圧倒的物量に潰

されるがいい」

さあ、今こそ。狂える顎門アギトに運命を。

「ばかな!」

鬼の攻撃の波を越え、立っていたのは俺だった。

総てを折れた刀で斬り伏せ、有限のスタミナを気合と根性でねじ伏せた。

ただ匂いをかぎ分け、地中からすら伸びてくる敵の手を残った短い刀身で叩き切ったのみだ。

そしてその果てに、いつのまにか鱗滝さんから借りた刀は、この夜の闇すら飲み込むほど漆黒に染まっていた。

「なんだ、その黒い刀身は。いや、そんなものはどうでもいい。色が変わった程度でなんだ。それよりもだ。人間の反射神経じゃどう足掻いても見切れるはずがない。さつきとはまるで別人だ。何をした?」

「恐れは越えた、ならば道など無限に拓けて当然だろう。人間は可能性の塊だ。勇気と気力と夢さえあれば、大概どうにかなるんだよ」

「冗談じゃない。狐小僧、本当に分かっているのか? その身体……

当たればそこで死ぬんだぞ？ 間違いない、たった一撃受けただけで」

言いたいことはわかる。

つまりこうだろう。

「馬鹿げているって？ まあ確かに俺も最初はそう感じたが——実践できればご覧の通り、極めて野蛮で強力だ」

「——いい加減にしやがれええッ」

「全集中——」

呼吸を。

ただ静かに集中する。

心臓がばくばくと唸る。

血液が最高速度で体内を駆け巡っているようだ。

それと同時に、体温がこれでもかと上がっていくのが分かる。

——そう、今だ。

「水の呼吸——参さんの型、流流りゅうりゅう舞まいい」

水流のごとく、流れる足運びによつて鬼に肉薄する。

道中、襲い掛かってくる腕を斬り落としながら。

だが、まだだ。

「陸ろくの型——ねじれ渦」

技を追加で出した。

しかし、不安定な体勢での繋ぎの技はそのまま鬼に掠ることなく、違う方向へ刀が振られる。

「外はずしたな？ そこだあああ！」

そう、この狙いは鬼を斬ることではない。

「なッ——づオ——馬鹿な——これはッ」

本来、上半身と下半身を捻った状態から、勢いを伴って斬撃を繰り出す、この勢いを足に回し、蹴る力に変換する。

そして蹴りこむ先は——半分に折れた刀身、その折れた断面だ。

そして、刺さった刀身をより深くまでねじ込む。

しかし、決定打にはなりえない。

鬼は、忌々しそうに刺さった刀身を己の身体から抜き出そうと蠢い

「ヒノカミ神楽——日暈の龍・頭舞い」
にちうんのりゆう かぶりまい

再生したであろう、腕の波が向かってくるが、総て流れるように粉碎し、突き進んでいく。

最後の一太刀。

頸に巻き付いた腕ごと水平に一文字、きつちり頸と胴体に二等分された鬼が、血飛沫と共に無様を晒した。

「——は、ア？」

「なんだよ。あのバケモノ共は」

「……」

ある少年は、目の前の光景を見てそう感想をこぼした。

先ほどまで続いていた戦闘によりやく決着が付き、恐らく鬼が勝てば次はこちらだという危機的状況にあったにもかかわらず、その勝利を喜べない。

相手は異形のバケモノ。

この藤の花の牢獄で人を多く喰らい、外見が変異して無数の腕をはやした人外。

それに仲間が勝利したというのに。

「おかしいだろ、少しは常識で物事を語れよ。鬼も、人間も」
アイツ

「……」

なぜなら、彼はどうしようもないほど一般的感性の持ち主だったからだ。

怖いものは怖いし、痛いものは嫌だ。

勝利すらも、代償があるなら求めはしない。

彼の主観では、戦っていた仲間が死に、次に自分たちが殺されておしまい。

決して、胸躍る、理不尽な逆転劇など望んでいなかった。気合と根性による、人間の可能性なんてばかっている。

そんなもの凡人に理解はできないし、したくもない。

そして、己は死にたくはないが、流れに逆らう気力もない。故に運命に従う、ただの凡人だと。

この、「最終戦別」ですら、少年は惰性のまま参加させられたのだ。そんな彼が、気合と根性、光という劇薬を見せられれば、強烈な拒絶反応を起こすのも当然のことであった。

「鬼は鬼で腕いっぱい生えてキモイし、アイツもアイツで違う型を使い分けてるって、何だよこれ」

少年は自身の刀の柄に手を置く。

まだこの牢獄で一度たりとも抜かれたことがないその刀の柄を。

あんな死闘、誰にでもできることではないと。

出来ない奴は出来ないのだと確かめるように。

「俺は……」

少年は言いようのない、いらだちを抑えるため深呼吸をした。

そして、同じように戦闘を見守っていた——いや少年は怖くて逃げられなかったのだが——少女に問いかけた。

「ねえ、君もそう思うだろ？ ……思うよね？」

きつと、同類に違いないと。

そうでなくては、この無様な自身を認められないと。

だが、少女の反応は少年の予想とはかけ離れたものであった。

「……すごい」

「はっ」

「すごい、炭治郎。すごいッ」

おそらく、あの戦っていた仲間の名前だろう。

それと呼んで賞賛する。

少女はそのサイドテールを揺らし、その色白い頬を上気させ、とても興奮した様子で、戦闘を終えた仲間を見つめている。

もはや少年など眼中にないようだ。

「ああああ、もういい！ ……好きなだけやってりやいいだろ、俺の知らないところで！」

ああいうのは特定層には刺さるのだろう。

ゆえに少年は悪態をつき、そつとその場を後にせんと立ち上がった。

もはや脅威も去った今、この場にはいたくない。

もうどうにでもなれと、あつけらかんに歩を進める。

「バケモノ共め！ 勝手にやってろもうたくさんだわ！」